



# 第16回訪問看護研究発表会

オンデマンド配信 令和4年4月1日(金)~19日(火)

## <開会のあいさつ> 研修委員長 島田 慎治

当会では訪問看護の質や知識の向上を図るため毎年、看護研究発表会を開催しています。本年度も昨年に引き続きWEB配信というかたちで行います。

新型コロナウイルス感染の終息の目途は立ちません。そのため昨年度の協議会の研修はほとんどが中止となりました。しかし、今年度は團野会長をはじめとする各担当者の尽力によりオンライン研修という新しい学びのスタイルによって数多くの企画を開催できました。

今から発表する看護研究は「日々の疑問」と「先人の知恵」を参考にしながらテーマを決定し、それぞれが現場で実践してきたかたちです。発表に関してもオンデマンド配信の利用で、当日参加できなかった方や、他地区の会員の皆様とシェアできる機会が増えたことは非常に嬉しく感じています。京都府の在宅医療・看護、介護の発展につながることを期待して開会の挨拶とさせていただきます。



## <司会進行> 研修委員 奥島 忍

<集録会場> 京都府立総合社会福祉会館  
ハートピア京都 3階大会議室

<講評>  
京都橘大学 看護学部 松本 賢哉教授



## 1. 各研究発表についての講評



A地区 「精神科疾患を持つ利用者に対する看護師の心理的変化  
～遊びを取り入れた関りから～」

栗野 初美 訪問看護ステーションはまなす

精神科疾患を持つ利用者との関係性を築くことの難しさを感じておられ、そこで「遊び」を取り入れることで、利用者との関係に変化はないか、また関わる看護師の気持ちの変化にも着目された。

結果、「遊び」は精神科疾患を持つ利用者との関係性を築くうえで効果があり、関わる看護師の気持ちにも変化がみられたということがわかった。発表時、結果のところにも看護師の気持ちの変化が入れば、尚良かったと思います。

**B 地区** コロナ禍における B 地区内での感染対策を考える  
～地区内での中間報告～

松久保 真実 京都府訪問看護ステーション協議会 B 地区支部

この研究をまとめられたのは第 5 波の時でした。是非、第 6 波の時も、同じ地区でデータを取って研究していただきたい。この地区がどう変わったかということがわかる縦断的研究として、貴重な研究になると思います。



**C 地区** 心不全患者における看看連携の現状把握  
～入退院時の科のサマリーを調査して見えてきた課題～

藤井 綾子 アットホーム訪問看護ステーション園部

心不全患者の病院からの退院時に、欲しい情報が看護サマリーに書かれていないことがあり、病院に送る在宅からの看護サマリーに対しても意見があるかもしれないというので比較ということで研究に取り組みました。心不全患者にとって、訪問看護は重要な役割を果たしているのは明らかである。病院の看護師と訪問看護師のお互いの立ち位置の違いを明らかにしてまとめられた、いい研究でした。



**D 地区** 超高齢独居者を支える多職種と訪問看護師の関わり  
～在宅介護員への意識づけとケアの統一を目指して～

江守 葉子 訪問看護ステーションぱあとなあず南

スキンケアをヘルパーさん等の多職種にもしてもらうにはどうしたらいいかと考えておられた。事例中心のまとめ方では事例発表に終わってしまい、読み手に伝わりにくい。今回の研究のポイントは看護師がどのような取り組みをし、ヘルパー等の多職種がどのように協力してくれるようになったかをまとめたこと。それによって、読み手に共感してもらえ、読み手に伝わる研究になった。



**E 地区** 親を介護する息子介護者の行動変容につながらない要因  
～親子関係を紐解く～

畑中 由紀子 訪問看護ステーションうじがわ

介護指導が入らない息子さんにどうすれば指導が入るか困っておられた。なぜ指導が入らないのか、原因を明らかにすることで対応方法が見えてきたケース。この研究方法はとても良かった。どうしたら人を変えられるかと思っている人は沢山いる。なぜそうなのかに着目した方がいい。結果、介入方法としていい勉強になったと思います。



**F 地区** 在宅ターミナルケアの看護実践能力の育成とその課題  
～訪問看護師の困難感からの一考察～

金森 佳子 訪問看護ステーションアソシア

看取り経験のないスタッフは、ターミナル期において話さなければいけないタイミングを逃してしまう。それはなぜかということに着目された。全スタッフにアンケートとインタビューをして分析された。結果、看取り経験者と未経験者で違いが出て、いい結果になったと思う。





## G地区 訪問看護を受けている在宅高齢者の栄養評価について ～MINA-SFとMNA-homeの比較～

石崎 真希 アドナース洛西訪問看護



他の地区もそうだが、G地区も同じ地区内で協力が得られて素晴らしいと感じた。この研究は、検査データ、対象人数も揃っていて良かったこと、また統計的手法を使った分析にMNA-SFだけでなく、MNA-homeを利用された。結果、MNA-homeのみに、血液中のAlb値まで反映できたということを実証でき、いい研究になった。



### <全体のまとめ>

研究テーマの絞り方について、皆さん疑問はしっかり持っておられます。研究テーマは、読み手に伝わり、読み手も活用できるものがある。今回の発表者は、計画段階から相談させていただき、どの研究も読み手に伝わるもので、いい形でまとまっていたと思います。



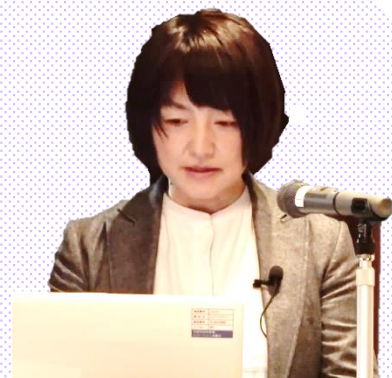
### <閉会のあいさつ> 研修副委員長 北仲 裕美

今回の研究に多大なご協力を頂きました松本先生には心から厚く御礼申し上げます。

コロナ渦において、看護の原点である“相手を思いやる心”に立ち返れた時間を持てたのではないのでしょうか。この看護研究で得られた知識や課題は次年度につなぐ大切な結果です。そして視聴される皆様には訪問看護の魅力を感じていただけたのではないかと考えております。

私たち一人一人は決して強くはないのだけれど、協議会メンバーとして団結して取り組みができた1年でした。

オンラインでの研修が多くなっている中、協議会研修委員としましては、みんなが顔を合わせる集合研修の必要性も感じています。また顔を合わせて議論しあえる日がくることを期待しながら閉会のご挨拶とさせていただきます。



### <研修を終えて> 研修委員長 島田 慎治

素晴らしい発表会でした。この1年、各研究担当者は興味のあるテーマに取り組み、それを論文としてかたちにしました。研修委員にとっても、この発表会は活動の集大成であり、今日を無事に迎えられホッとしています。

発表会はYouTube配信されます。オンデマンド配信の利点は、多くの方に視聴していただけることです。視聴された皆さまから、どんな質疑や意見をいただけるか、楽しみにしています。また、次年度は会場に聴衆を迎えて開催できることを祈っております。ありがとうございました。

### <編集後記> 広報委員長 安井 有里

研究発表にあたり、担当者をはじめ研修委員の皆様、その他携われた方々、大変ご苦労様でした。どの地区の発表も大変興味深く拝聴させて頂きました。発表までの取り組みは大変だったと思いますが、有意義な発表会になり良かったと思います。コロナ渦の中、2年連続のオンデマンドでの発表となりましたが、たくさんの方に視聴していただき、今後の看護の取り組みの参考になればと願っております。